

令和元年5月13日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26350717

研究課題名(和文)大正後期～昭和初期における「体育ダンス」教材の受容と紹介

研究課題名(英文) A Study on the Acceptance and Promotion of Gymnastic Dance as a Teaching Material of Physical Education in the Latter Taisho - Era to Former Showa - Era

研究代表者

廣兼 志保 (HIROKANE, Shiho)

島根大学・学術研究院教育学系・教授

研究者番号：00234021

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、大正8(1919)年から昭和11(1936)年まで日本の体育指導者達が欧米の体育ダンス教材を我が国に紹介する過程で、教育理論と教材がどのように取捨選択されたかを明らかにすることである。本研究では大正15(1926)年に荒木直範(1894-1927)が紹介した体育ダンス教材のうち、ナチュラルダンスの事例を取り上げた。荒木がアメリカ合衆国への留学時に視察したウイスコンシン大学のMargaret H' Doubler(1889-1982)のダンス教育の理論と教材を明らかにし、荒木の教材とH'Doublerの教材との比較を通して、教育理論と教材の取捨選択の様相を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

H'Doublerが1920年代初頭に指導した教材が具体的にどのような運動や活動から構成されており、彼女の教育理念をどのように具現化していたかを明らかにしたことを通して、教科教育学・運動学・音楽学・歴史学を繋ぐ学際的なアプローチから本研究を行うことができた。本研究が明らかにした教材は、解剖学・力学・音楽理論における普遍的な科学的知見を基盤とした学習内容を含んでいた。この点において、本研究の成果は、現代の学校体育においてもダンス教育の素材研究に新たな示唆を与え得る。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify how Japanese physical education teachers chose western educational theories and teaching materials for gymnastic dance from western education that was promoted as gymnastic dance in Japan from 1919 to 1936. This study focused on the case of natural dance education that Naonori Araki (1894-1927) promoted in 1926. This study clarified Margaret H' Doubler's (1889-1982) educational theories and teaching contents that Araki had learned from her dance education activities at University of Wisconsin when he studied in the United States of America. This study clarified differences between H' Doubler's teaching materials and Araki's teaching materials by comparing their teaching materials.

研究分野：体育科教育学

キーワード：ナチュラルダンス 教育理論 教材 1920年代 Margaret H'Doubler 荒木直範

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

大正後期から昭和初期の体操科は、体育指導者による留学や海外視察を通して教材や指導方法の改善が試みられた。それらの試みは、学校体操教授要目の2度にわたる改正を導いた。しかし、外来の体育運動と芸術の技法を導入する際に、学習内容や教材の選択において何が取捨選択されたのかについては、これまであまり研究されてこなかった。

筆者は昭和2(1927)年に日本で出版されたダンス指導書とその原典となったアメリカ合衆国(以下、アメリカと省略)のダンス指導書と比較しながら講読することを通してアメリカのダンス教材がどのような文脈で日本に紹介されたかを考察する過程で、アメリカのダンス教材を日本に紹介する際に、ダンス教材の背景としてアメリカの指導書には記載されている教育理論や運動理論についての説明が日本の指導書では欠落していることに気づいた。

教材の受容過程における教育理論や運動理論の欠落や教材に含まれる運動の改変の様相は、これまで体育科教育史研究、なかでもダンス教育を対象とした研究において語られてこなかった。そこで、本研究は未開拓であったこれらの様相の解明に取り組むたいと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、外来の教材を受容し我が国に紹介する過程で、背景にある教育理論や運動理論がどのように取捨選択されたかを考察することを目的とした。なかでもナチュラルダンス教材の受容と紹介において欠落していった教育理論や運動理論は何だったのか、ということをはっきりとすることを目的とした。

この解明によって、戦後の日本の創作中心のダンス教育が、教育理論や運動理論において、移入元のアメリカのそれとは異なる方向へ進展していったことの原点を探る手がかりを得ることができよう。さらに、その成果を未来に活かすという観点からは、ダンスという身体運動の構造からどのような学習内容が抽出されるのか、またそれらが現代のダンス教育にも通じる普遍性をもち得るのかについて解明する手がかりを得ることが期待できる。

3. 研究の方法

本研究は「欧米に於ける体育ダンスの新傾向」として、欧米留学後の1926年に日本にナチュラルダンス教材を紹介した荒木直範(1894-1927)の事例に着目した。そして翌年に病没したため荒木が紹介することのできなかつたナチュラルダンスの背景にある教材観、指導観、学習内容、及びそれらを具現化する教材の構造を明らかにすることを試みた。

具体的には、アメリカ留学中に荒木が視察し「(ナチュラルダンスの)創始者の趣旨に対する最も忠実な実行者である」と評価したウィスコンシン大学マディソン校のMargaret H'Doubler(1889-1982)のダンス教育理論と教材を対象に、彼女が1921年に出版したダンス指導書である“*A Manual of Dancing: Suggestions and Bibliography for the Teacher of Dancing*”を主な資料として、以下の(1)~(4)を明らかにした。

- (1) H'Doubler が提示した教材観、指導観、そしてダンス担当教員の育成において H'Doubler が学習者に求めた学習成果を明らかにした。
- (2) ダンスの動きの基礎要素を学ぶための教材である“*Exercises for Fundamental Motor Control*”を対象に、教材の構造を明らかにし、教材に含まれる学習内容と指導方法とを考察した。
- (3) 運動を通じた音楽の認識と理解のための教材である“*Realization and Appreciation of Music through Movement*”を対象に、教材の構造を明らかにし、教材に含まれる学習内容と指導方法とを考察した。
- (4) (1)(2)(3)で明らかになった内容を互いに照らし合わせ、H'Doubler のダンス教育に一貫する教育観と指導観の特徴を明らかにした。

また、上記の(1)~(4)の作業を進めるために H'Doubler 関連の史料やウィスコンシン大学関連の史料を収集するうちに、新たな研究仮説、すなわち「荒木への H'Doubler の影響は、ナチュラルダンスの理論や教材として直接的に表れたというよりもむしろその深層にある諸科学の理論を基盤としたダンス教育の実践や地域の地域社会への還元といった姿勢に表れているのではないか」という仮説を見出すことができた。そこで、研究期間を延長し、この仮説を検証するため、以下の(5)~(6)に取り組んだ。

- (5) 当時のウィスコンシン大学が掲げていた研究・教育方針に関する史料や先行研究を収集し、H'Doubler がダンス教育においてウィスコンシン大学の研究・教育方針をどのように体現していたかについて考察した。
- (6) 荒木の留学に関する史料を収集し、荒木がどのような経緯でウィスコンシン大学を視察先に選択したのかについて考察した。

4. 研究成果

本研究の結果、以下の(1)~(6)が明らかにされた。

- (1) H'Doubler が提示した教材観、指導観、学習者に求めた学習成果

H'Doubler が提示した教材観

H'Doubler は、個人の発達に貢献しうるダンスの教育を探究し、自己表現としてのダンスの実現をめざした。彼女は、ダンスを身体運動による創造的な自己表現活動であると捉えた。そして、表現媒体としての身体が基本的な動きを自在にコントロールできるようになってこそ、自由な身体表現ができるようになることを主張した。基本的な動きは、人体に解剖学的に備わっている部位ごとの単純な動きから成り立つものであり、ダンスの練習に必要な基礎要素である、と H'Doubler は考えていた。

H'Doubler が提示した指導観

H'Doubler は、学習者の創造性を育てるために、他者の動きの模倣でなく、学習者自身の身体感覚の知覚を通して基本の動きを理解し習得させるという指導をめざした。そのため、解剖学的な観点や運動学的な観点から学習者に動きを理解させようとした。

H'Doubler が学習者に求めた学習成果

H'Doubler は、学習者に、観察と体験により、実践と理論、及び主観的な認知と客観的な分析とを往還する過程を通して、基本的な動きの構造を理解しコントロールできるようになることを求めた。

(2) “ *Exercises for Fundamental Motor Control* ” の構造と学習内容及び指導方法

“ *Exercises for Fundamental Motor Control* ” の構造

ダンスのための基本的な動きを理解しコントロールできるようになるための教材として、H'Doubler は “ *Exercises for Fundamental Motor Control* ” を提示した。分析の結果、“ *Exercises for Fundamental Motor Control* ” は「上半身」「下半身」「全身の部位のコーディネート」の3つのまとまりから構成されていることがわかった。これらの教材群の特徴を示す基本的な動きは<関節の動きや制限>、<反動の動き>、<移動の動き>、<リープ(跳躍)>、<ロール(回転)>、<臥位から立位への姿勢の転換>の6つの下位教材群にまとめられた。

それらの下位教材群は、部位ごと・運動の種類ごとの、臥位・座位・立位における様々な姿勢での身体運動のエクササイズや、部位ごとの動きを全身の動きへとコーディネートするエクササイズによって構成されていた。

“ *Exercises for Fundamental Motor Control* ” に含まれる学習内容

“ *Exercises for Fundamental Motor Control* ” に含まれる学習内容の例として、骨盤や肩甲骨といった関節を屈曲、伸展、回転、回旋させるエクササイズを通して体幹の大きな関節と腰椎や前腕や手といった部位との連動が学ばれたり、反動や歩行や跳躍のエクササイズを通して体重移動のタイミングや重力の中心のアライメントが学ばれたりしていたことが明らかになった。

“ *Exercises for Fundamental Motor Control* ” の指導方法

“ *Exercises for Fundamental Motor Control* ” を指導する際のエクササイズの配列の特徴として、部位から全身へ、臥位から立位へという方針があることがわかった。

(3) “ *Realization and Appreciation of Music through Movement* ” の構造と学習内容及び指導方法

“ *Realization and Appreciation of Music through Movement* ” の構造

音楽の簡単な構造についての一般的な理解を学習者に与え、動きを通してその基礎的な特徴を意識させるための教材として、H'Doubler は “ *Realization and Appreciation of Music through Movement* ” を提示した。分析の結果、“ *Realization and Appreciation of Music through Movement* ” は12のアイデアから構成されていることがわかった。

“ *Realization and Appreciation of Music through Movement* ” に含まれる学習内容

で明らかにされた12のアイデアに示された各教材を分析した結果、「音楽の構造と要素の理解」「音価の知覚と運動の知覚の統合」「強弱による音と動きの質感の理解」「楽曲例を用いた総括的学習」の4つに大別される学習内容を見出すことができた。

それらの学習内容は、音楽の構造と要素を学んだ後に、音と動きとを結びつけてフレーズの構造を知覚させ、さらに、音と動きの強弱の質感とアクセントのつけ方を学ぶ、そして、総括的に楽曲例を用いて小グループで即興的に動くことを学ぶ、というように段階的に展開していると推察できた。

“ *Realization and Appreciation of Music through Movement* ” の指導方法

“ *Realization and Appreciation of Music through Movement* ” においては、「主観的な知覚と客観的な理解を統合させる」「知的な理解と情緒的な表現を統合させる」「様々なヴァリエーションを体験させる」「動きの探求と創作によって自発性を育成する」という4つの特徴を見出すことができた。

(4) H'Doubler のダンス教育に一貫する教育観と指導観の特徴

H'Doubler は、「理解は知性を伴う。この重要な要素が欠ければ、経験は娯楽となり理解とはならない。」(H'Doubler,1921,p.57)と述べており、経験を理解へと発展させるために、知的な理解と経験とを統合させることを重要視していたことがわかった。

H'Doubler のダンス教育においては、学習者が観察と体験を通して実践と理論を往還し、そして主観的な認知と客観的な分析を往還しながら学ぶことが重要視されていた。このことは、“*Exercises for Fundamental Motor Control*”と“*Realization and Appreciation of Music through Movement*”とに共通してみられた特徴であった。

(5) ウィスコンシン大学の研究・教育方針における H'Doubler のダンス教育理論と実践

ウィスコンシン大学の研究・教育方針やその動向に関する史料や先行研究を調べたところ、H'Doubler がダンス教育を展開していたウィスコンシン大学には、“The Wisconsin Idea of Education”といわれる研究・教育方針があったことがわかった。これは、州立大学は全ての州民のための開かれた大学を目指し大学の研究成果の社会への還元を通して社会の進歩に貢献するべきであるという考え方であり、労働者に対する教育機会を拡充することで富の公正な再配分をもたらし、民主主義社会を実現しようとする考え方であった(五島,2008,p.70,84,94)。

このような大学の研究・教育方針のもと、H'Doubler が提唱したダンス教育もまた、全ての人々を対象とする一般教育として構想されたものであった。彼女が提唱したダンス教育理論は“*The Wisconsin Idea of Dance*”と呼ばれた。そして、ウィスコンシン大学マディソン校ダンス専攻の卒業生がダンス指導担当の教師としてウィスコンシン州内外の各地に赴任していくとともに、“*The Wisconsin Idea of Dance*”も全米に普及していった(木場,2017,pp.81-83)。H'Doubler のダンス教育の特徴である実践と理論の往還や主観的な認知と客観的な分析の往還は、当時のウィスコンシン大学が掲げていた研究・教育方針とも共通しており、大学の知の地域社会への還元についても、H'Doubler が指導する学生のダンスグループOrchesisの市民向けダンス公演活動などにより積極的に実践されていたことがわかった。

しかし、“*The Wisconsin Idea of Education*”におけるH'Doubler のダンス教育理論や実践の位置づけを明らかにするには、さらに史料を補足しより詳細に考察する必要があるので、今後も引き続きこの主題の解明に取り組んでいきたい。

(6) 荒木がどのような経緯でウィスコンシン大学を視察先に選択したのか

上述のように“*The Wisconsin Idea of Dance*”が目指した諸科学の理論を基盤としたダンス教育の実践や知の地域社会への還元による生活改善活動は、欧米留学からの帰国後に荒木が結成した大日本体育遊技研究会が掲げた活動方針の中にも見出せる。このような両者の共通点は、偶然に発生したものなのか、それとも、荒木のウィスコンシン大学視察が何らかの作用を及ぼして発生したものなのかを考察するため、まずは荒木のウィスコンシン大学視察の経緯を探った。

荒木の欧米留学が誰の助力によって実現できたのか、荒木のアメリカ合衆国での主たる留学先はどこか、留学先とウィスコンシン大学とのつながりは何であったのか、について史料を探索した結果、荒木直範は、東京YMCAの助力によってシカゴ大学に留学していたことがわかった。当時、シカゴ大学は、ウィスコンシン大学と同様に、大学拡張を通して大学の知の地域社会への還元を積極的に行っていた。シカゴ～マディソン間は比較的近距離にあるため、荒木は当時先進的な実践で有名であったウィスコンシン大学マディソン校を訪れたのではないかと推察できた。

しかし、シカゴ大学からウィスコンシン大学につながる経緯や両者と荒木との関係を明らかにするためには、さらに史料を補足しより詳細に考察する必要があるので、今後も引き続きこの主題の解明に取り組んでいきたい。

<引用文献>

- 荒木直範、体育ダンス教材集第一編、都村有為堂、香川、1926、5,12
H'Doubler, M.N、*A Manual of Dancing: Suggestions and Bibliography for the Teacher of Dancing*、Tracy & Kilgore, Printeps, Wisconsin, 1921、57
五島敦子、アメリカの大学開放 ウィスコンシン大学拡張部の生成と展開、学術出版会、東京都、2008、70,84,94
木場裕紀、アメリカ高等教育におけるダンス教育の誕生、教育学研究、第84巻第2号、2017、79-85

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

廣兼志保、Margaret H'Doubler(1889-1982)の“*Realization and Appreciation of Music through Movement* (1921)”の分析 - 学習内容と指導方法に焦点をあてて - 、島根大学教育臨床

総合研究、査読無、18巻、2019、印刷中、<http://ir.lib.shimane-u.ac.jp/ja/journal/E-BCR>
廣兼志保、Margaret H'Doubler(1889-1982)が提示した“*Exercises for Fundamental Motor Control*”(1921)についての考察、スポーツ教育学研究、査読有、35巻、2015、29-41
DOI:10.7219/jjses.35.2_29

〔学会発表〕(計2件)

廣兼志保、Margaret H'Doubler(1889-1982)のダンス教育における音楽の学習内容と指導方法～“*A Manual of Dancing: Suggestions and Bibliography for the Teacher of Dancing*(1921)”からの考察～、日本教育大学協会保健体育・保健研究部門舞踊研究会 第36回全国創作舞踊研究発表会、2016.

廣兼志保、Margaret H'Doubler(1889-1982)によるダンス教材“*Exercises for Fundamental Motor Control*”(1921)の考察、日本スポーツ教育学会第34回大会、2014.

6 . 研究組織

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。